

第3回 根室市ゼロカーボン計画策定委員会

日時：2025年6月27日 17:00～18:30

会場：根室市役所2階防災研修室（201・202）

出席者	委員	10名
	オブザーバー	根室市歴史と自然の資料館学芸員
	市	（事務局）干野生活環境課長、中澤環境衛生主査、中川主任 北電総合設計(株)環境調査室 内山室長代理、浜中技師

1. 挨拶

【委員長】

委員の皆様におかれましては、何かとご多忙な中ご参集いただき誠にありがとうございます。根室市ゼロカーボン計画策定委員会につきましては、昨年度は12月19日に第1回目、そして2月21日に第2回目と、通算二度にわたり、根室市の地球温暖化対策や、再エネ導入、市民の意識調査の結果に基づいた施策の方向性などについて、活発な意見交換を行って参りました。今回の3回目の策定委員会では、道内各地の施策の事例紹介、ブルーカーボン、湿地及び湿原に関する説明、省エネに関する取り組みの提案などについてご協議いただくことになります。

今年度は、計画を策定する年度となっており、お集まりの皆様におかれましては、活発な意見及びご提案をいただきながら本年度末の計画策定に向けて精力的に取り決を進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

なお、委員の中に変更がありましたので、ご報告いたします。根室湾中部漁業協同組合の木村委員並びに道東あさひ農業協同組合根室支所の市橋委員が人事異動に伴い退任され、新たに根室湾中部漁業協同組合の木下さん、道東あさひ農業協同組合根室支所の亀田さんが新たに委員となりましたので、この場をお借りしてお知らせいたします。それでは、以上を持ちまして、開会に先立ってのご挨拶といたします。皆様本日はよろしくお願いいたします。

2. 質問回答

【事務局から、委員の皆様より頂いた質問及び提案に対する回答が行われた。】

2.1. 質問回答についての意見及び質問と回答

○P 委員

質問に対して回答していただきましたが、理解できないところが数々ありました。我々はゼロの状態からこの委員会に入っているため、今の説明でも理解できないことが多くあります。例えば、「ポテンシャルは余裕がある」、「既設の太陽光発電設備は津波浸水区域に一部入っています」と言われても、どのように解釈すればいいかわかりません。改めて聞きたいことを整理するために、帰宅後にもう一度資料を見て復習しないと質問が出てこない状態です。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

皆様は「この委員会で我々は何をすればいいか」がはっきりしていなくなっていると思います。「何を議論して考えなければいけないのか」と言いますと、例えば、先ほどの小山委員の質問の「ポテンシャルに余裕がある」ことについて、根室市は風力及び太陽光を導入できる場所が潜在的にたくさんあるものの、自然景観や守るべきものもあります。したがって、「何を重要視して決めていけるか」を選択することができる幅がある、と解釈し、ご意見を述べていただくのが良いかと思います。

また、津波浸水区域に太陽光設備が設置されているという指摘もありましたが、「津波浸水区域に入っているのなら、市民の安全を考慮して除外していかないといけない」、「漁業及び農業活動に影響を与えそうな場所も適していないのではないか」、「観光資源で重要なエリアは設置すべきではない」等の意見をこの委員会を出していくということが重要だと思います。

○P 委員

外山学芸員の説明で委員会の進め方などはなんとなく理解しましたが、まだ十分に理解できておらず、このまま年度内に計画が固まってしまうことを怖く感じます。そのため、しっかりと内容を理解したいです。

○委員長

外山学芸員の話聞き、理解した部分もあります。しかし、この委員会で求められているのは、ゼロカーボンに向けた計画策定に向けて、国が定めた目標を達成するために、根室市がどのような順番で物を進め、数字として目標を定めていくものかを検討するものだと思っています。今までの資料から、「ポテンシャルがあるということは、これだけのものが生み出せる地域だ」と特定し、その上限値からゼロに近づけるために、使用量と吸収量を引いて計算をして、その中で、我々が環境保護及び自然保護の観点から規制をかけていくという方向だと思っています。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

規制を望む意見は、条例やガイドラインを作っていく中で必要になります。そして、根室市は湿原やブルーカーボンの吸収量を収支に加えると、ゼロカーボンの達成が容易になります。例えば、根室市の湿原が固定している炭素量は試算で47年分となりますが、これを1年分ずつ切り崩していくと、47年間ゼロカーボンを達成し続けることが可能になります。そして、47年後の二酸化炭素収支は、現在の森林吸収量やブルーカーボンの値を合算するとゼロに近い値になります。しかし、湿原は開発をすると温室効果ガスを排出する場でもあるため、施策として「土地型の太陽光の建設よりも、湿原のような自然環境を保全するのが優先だ」と舵を切ることも可能です。

△事務局（北電総合設計株式会社）

先ほど外山学芸員は「湿地湿原の貯留量は47年分あり、ゼロカーボンの達成は容易である」と仰っていましたが、事務局の理解は少し異なっています。湿地湿原に存在する47年分の貯留量は、何万年も前から貯められてきており、これを切りくずして根室市の温室効果ガス排出量に充当するのは不適切だと思います。むしろ、この湿地湿原は、開発の手が入ると二酸化炭素を放出してしまう爆弾というリスクを抱えていると解釈するべきかと思います。したがって、根室市の湿原は、「炭素を貯めてゼロカーボンに繋げられるもの」というよりも「二酸化炭素の排出源になりかねないもの」という考えの方が、ゼロカーボン達成及び自然保護の観点から大切だと思います。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

事務局の考え方で問題ないと思います。湿地湿原を優先的に保全して「泥炭」の二酸化炭素を排出させないようにするのが大切だと思います。そして、収支のグラフ（第3回委員会質問回答p8、p9 参考）と、それに湿地湿原とブルーカーボンの試算値を加えた仮のモデルを比較してみる必要があります。

○OL委員

先に再生可能エネルギーの設置場所を規制しないと、湿原保全の施策を決めても無駄になってしまうのではと懸念しています。したがって、まず再エネ設備の設置を規制する場所を早急に決めないといけないのではないかと考えています。

○副委員長

一度論点を整理しましょう。そもそも目標値は、北海道の温室効果ガスのうち二酸化炭素排出量を根室市の人口比や産業比の係数にあてはめて出した平均値です。そして、我々は二酸化炭素の排出量を2050年までにゼロにするために施策を整理しますが、私たちがとりわけ大きく再エネに投資したとしても、根室市の温室効果ガス削減効果は目に見えない可能性があります。それと環境保護の話はまた別なのではないでしょうか。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

目標値の設定自体は、市町村単位で設定されるので、根室市も根室市の目標値に向かって何をするかという施策を議論するものと思います。その中で、根室市の持っている吸収量や、再エネ発電量を考えながら議論するということになると思います。

○副委員長

目標値というのは、まず 2050 年までにゼロカーボンを達成するためにこういうストーリーをします、というのを数字で示しており、その上での話ではないでしょうか。そこから根室市の多大なポテンシャルの中で、保全する場所と再エネを導入する場所を決めればいいという話だと捉えています。つまり、保全ありきの話ではないし、数字ありきの話でもないと思っています。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

保全の仕方と目標数値は連動すると思っています。二酸化炭素の収支のバランスというものは、どこまで保全ができて、どこまで導入ができるかが、ある程度、数値として算出できると思います。根室市は、湿原やブルーカーボンの吸収量も加味すれば、建物型の太陽光だけで 2050 年後にゼロカーボンになる可能性もあり、その上でオプションとしてどういうことができるかを考えると、根室市らしい取組みになると思います。

△事務局（北電総合設計株式会社）

第 2 回委員会でお示した再エネ導入の目標値は、根室市の統計情を基に、国の目標値や環境省のマニュアルを勘案して算出した案分値です。これには環境保全・保護という観点から湿地・湿原の吸収量が入っていませんでしたが、これを含めると、再エネの導入目標値が減ることになりますが、これはむしろ根室市の特色を出した計画となるとも言えます。

○OP 委員

今 3 人が話していたことも理解できていないので、議論するのは難しいです。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

私たちには「どうしたら二酸化炭素の収支がゼロになるか」に対しての選択肢が 3 つあります。1 つ目は森林やブルーカーボンを保全して、二酸化炭素の吸収量と固定量を確実に確保するもの。2 つ目は省エネ活動を行うことで、消費電力及び温室効果ガスを削減するもの。そしてもう 3 つ目は化石燃料に頼らない再生可能エネルギーを導入するものになります。この 3 つのオプションの中で、どういう選択をするのが「根室市らしい」かということが論点となります。

その中で、根室は湿原や自然環境の保全によって担保ができる部分がありますが、プラスで省エネを行うのか、建物型や土地型の太陽光を導入するのか、それぞれのバランスを考えて、市民の立場で意見を出すのがこの委員会だと思います。

また、寺田副委員長が仰っていたのは「目標値に対して向かっていくためにも、値というものを皆で明確に理解する必要がある」ということです。温室効果ガスや消費エネルギーが、人口

の減少、再エネの導入、自然を守ったら、等を組み合わせて、どのくらい減るか？といったことに、共通認識を持っておきましょう、ということかと思います。

○M 委員

これまで、どちらの方向に向いて考えればいいのか分かっていませんでしたが、少しずつ理解できてきました。

○根室市歴史と自然の資料館学芸員

「根室らしい根室の答え」というものを皆様で出していくのが大切だと思います。

なお、市民だけでなく、産業もカーボンニュートラルを目指すことが重要であり、「消費電力や温室効果ガスの排出を抑えられる機器を用いて漁業や農業を行っています」となった場合、それが産業・企業への評価や MSC 認証などに繋がってきて優位に働くこともあります。これらの周辺事例は、事務局に伺って見たら具体的なイメージができると思います。

○委員長

それでは、「周辺事例の話を聞いた方がイメージしやすい」という観点で、次の方に移らせていただきます。

3. 資料紹介

【事務局から、第1回及び第2回の簡易的な流れの確認の後に、「政策の事例紹介について（会議資料1）」、「ブルーカーボンについて（会議資料1）」、「湿地湿原について（会議資料1）」、「省エネの取り組みについて（会議資料1）」、「太陽光発電に係るシミュレーションについて（太陽光モデル資料）」についての説明が行われた。】

3.1. 委員会全体における質問と回答

○N 委員

第2回会議資料において、湿地湿原の情報は何を使用していますか。

△事務局（北電総合設計株式会社）

環境省の公開データを使用しています。

○N 委員

根室市は牧草地などの土地全部が湿原といえると思います。

△事務局（北電総合設計株式会社）

確かにそうだと思いますが、実際計算する時の根拠は環境省のデータを使用しております。

○N 委員

ありがとうございます。省エネの事例の方も伺いたいのですが、市有施設に太陽光パネルを設置している事例は、既存の建物に設置しているのでしょうか。

△事務局（北電総合設計株式会社）

そうですね。これまでは後付けのものも多くありましたが、最近は新規の建物に標準的に太陽光パネルをつけるケースが多くなっていると思います。

○N 委員

どんな建物にも太陽光発電設備を付けたらよいと思っていますが、建物に太陽光パネルを設置する際、維持管理に関する問題がありますか。

△事務局（北電総合設計株式会社）

建物の構造上、屋根に載せられるものの荷重は決まってしまうため、古い建物等は、載せられない場合もあります。しかし、太陽光パネルは技術の発展が進んでおり、今後はペロブスカイト型のようなフィルム状に貼ることができるものも実用化する流れにあるため、今までよりいろんな場所に普及していくことが予測されます。

4. 根室市の再エネ発電施設建設に係るガイドラインについて

【事務局から、「根室市の再エネ発電施設に係るガイドライン（別紙2）」の説明が行われた。】

5. 今後のスケジュールについて

【事務局から今後のスケジュールについての説明が行われた。】

6. その他

○副委員長

これまでは難しい話でわからないことも多くあったと思いますが、今回の意見交換で、「目標の年までに省エネや再エネを用いて二酸化炭素の排出をゼロにするという中で、根室市にふさわしいやり方でいきたいですね」という方針が出されたのかな、という整理で良いと思いました。

以上